

古典満洲語の「同格の属格」について

早田 清 冷

日本学術振興会特別研究員／京都大学

【要旨】 本研究は満洲語の「同格の属格」と言われる現象の分析である。満洲語は日本語とは異なり、「女である私達」を表す際に、men-i (私達の) hehe niyalma (女) のような第一名詞句が定であり属格形で現れる表現が可能である。本稿ではこの第一名詞句が従属節の属格主語であると主張する。コーパス中のコピュラ連体形の用法を分析する事により、1「コピュラに関する従来の記述に反してコピュラの未完了連体形がゼロ (音形なし) になり得る (むしろ通常はゼロである可能性が高い)」事を示す。また2「このゼロコピュラの主語もそれ以外の動詞の主語同様に属格主語になり得る」事も指摘する。この1, 2により、満洲語の「第一名詞句が属格形になる同一指示の名詞連続」 $NP_{1i} -i + NP_2$ (NP: 名詞句, $-i$: 属格標識, $;$: 同一指示) を名詞句「 NP_1 に属する NP_2 」ではなく基底でコピュラ終わりである従属節「 NP_1 が NP_2 である (の)」と考えることが出来る*。

キーワード: 満洲語, ゼロ, コピュラ, 属格主語, 主要部内在型関係節

1. 問題の所在

本稿は古典満洲語 (以下原則として満洲語¹と呼ぶ) について、「属格主語」や「コピュラが音形を持たない場合」について、従来の記述が不十分な点を指摘した上で、「同格」を表すとされている属格標識が、無音のコピュラで終わる従属節の「主語」を表す属格標識であることを示す。満洲語の格標識 $-i^2$ はかなり多機能に見えるが、

* 本論文の執筆にあたり、田窪行則教授、上山あゆみ教授に貴重なご指導を頂いた。また、お二人の『言語研究』匿名査読者および、編集委員の方々には草稿に対して詳細な御助言を頂いた。この場において感謝申し上げる。本研究は日本学術振興会 (JSPS) 科研費 24・5815 の助成を得たものである。

¹ 満洲語はツングース語族に属する。本稿で扱うのは清代 (1616-1912) の古典満洲語である。

² 満洲語ローマ字転写は、いわゆる Möllendorff 式表記を改変し、以下の場合に記号を挿入したものを用いる。① 1.2.1 節で述べるように、満洲語の格標識は分かち書きされる場合と、されない場合があるが、分かち書きされた格標識の $-i$ は独立形の i (自立語として用いられる) と字形が異なるから、「スペース + $-i$ 」と表記して、自立語の i と区別した満洲文字の表記を反映させる。満洲語学では格標識 $-i$ が語幹に続けて書かれる場合は一般的にハイフンを書かないが本稿では分かち書きの有無に関わらず $-i$ とする (分かち書きされない場合はスペースを用いない)。② 漢語の多音節語の発音を満洲文字で表記する際に分かち書きしたものは「・」で区切って表記する。このような漢語の分かち書きはされる場合とされない場合があり一定しないが本稿では資料の通りに転写することとする。

例： 一般的な転写 syma i i cooha
 本稿の転写 syma·i -i cooha
 司馬・懿 -i 兵
 「司馬懿の兵」

-iの機能自体は連体節の主語の標識、連体修飾の標識、具格の標識に過ぎず、それほど特異なものではないと結論づける。

1.1. 本稿で分析する資料

順治7(1650)年序、24巻本の満洲語訳『三国志演義』(ilan gurun -i bithe, 以下『満文三国志』)を資料とする。北京遷都以前に言語形成期を過ごした世代による満洲語の文献資料であり、コーパスの規模は約50万語で、満洲語で書かれた単一の言語作品としては最大の規模のものである。

1.2. 満洲語の格標識 -i

他のツングース諸語に対する満洲語の特異性の一つとして属格形の存在が池上(1999 [1979])などで指摘されている。属格標識の-iは文献中の満洲語において最もよく目にする形態素の一つである。また、満洲語では属格を表す標識と具格³を表す標識が同じ-iという形をしている。同音の別の格標識のように記述される事が多いが、Gorelova(2002)は明確に同一の格標識(属格)の異なる用法として記述している。本稿は後者に与する主張はしないが、狭義の属格標識の用法であるか否か怪しい現象を扱う以上、以下では「具格標識」-iも含めた格標識-iの表記、形態と用法を概観する。「同格の属格」の議論は属格の-iと具格の-iが同一の形態素であるか否かという問題にも関わるものである。もしも、一般的な属格の-iの用法(連体用法と主語用法)とは独立に-iに「同格」の用法が有るならば、具格も含む格標識-iの全ての機能を「句と句を繋ぐ形態素」として一般化する事が妥当性を増し、これはGorelova(2002)のような単一の格標識であるという解釈を支持する結果になる。逆に(本稿の結論のとおり)「同格の属格」が属格標識の主語用法の範疇に含まれるならば、共時的には具格の-iは属格の-iとは同音だが別の格標識と解釈した方が過度な一般化を試みるより妥当であろう。

1.2.1. 格標識 -i の表記／異形態

満洲語の属格・具格標識-iはこの言語の他の格標識同様に体言に後置される。語幹に続けて書かれる場合と離して分かち書きされる場合がある。この格標識-iは環境によりゼロになる場合とniとなる場合とがある。満洲文字の表記上の問題なのか異形態を反映したものなのかは議論の余地があるが、この問題には踏み込まない。ここでは、以降の議論に関わる文字表記上の音形についてのみ述べる。

まず、母音iで終わる語幹だけは、明らかに語が属格形である筈の文脈で-iが書かれない⁴事が多々ある。『満文三国志』では語幹末のiに格標識-iが続けて書かれ

³ 具格は属格と異なり満洲語以外のツングース諸語に一般的に存在する。

⁴ 断定はできないがこの綴りは、通常の発音で-iが単独の音節として発音されず語末の母音と融合して一音節で発音されていた(満洲語には音韻的な母音の長短が無い)等が原因とし

る事は無く⁵、分ち書きされる(1)か、書かれない(2)か、のいずれかである。

- (1) syma·i -i cooha
 司馬・懿 -i 兵
 「司馬懿の兵」
 原漢語：司馬懿⁶ 20067a⁷
- (2) syma·i cooha
 司馬・懿 兵
 「司馬懿の兵」
 原漢語：司馬懿兵 20069a

従って、もともと母音*i*で終わっている語の格標識無しの形は属格の用例としても属格でない用例としても採用することが不可能である。

また、格標識*-i*は*ni*と表記される事がある。最初期の満洲語の資料では殆ど全て*-i*と書かれていたのだが時代が進むと次第に*ng*の後で*ni*と表記されるようになった(詳細は早田輝洋 2012 参照)。『満文三国志』では*ng*の後にはほぼ*ni*であるが、若干の例外があり、*ng*の後で*-i*と書かれた例も16例ある。また、*n*で終わる語の後でも*ni*と書かれた例が5例ある⁸。他の音で終わる名詞語幹の後ではこの様な*-i*と*ni*の表記の混乱は無い。

1.2.2. 格標識 *-i* の用法

今まで言われている事に従うと、格標識*-i*には大きく分けて「同格」用法のもの以外に、少なくとも①連体用法、②連用用法(具格標識)、③主語用法、の3つの用法がある。日本語の「赤いを取る」の「の」の様な、主要部のスロットに来る形式名詞的な用法は無い。すなわち、動詞連体形、形容詞、名詞属格形の修飾を受ける体言としての機能は無い。また、日本語は「僕を取る」の「僕の」の様に、連体用法の形と同じ形「NP+の」が「NPと関係を有するモノ」の意で名詞的に用いられるが、満洲語の格標識*-i*にはそのような用法は無い。以下、①～③それぞれの用法の例を挙げる。

て推定される。

⁵ *ii*という綴り自体は満洲文字で可能である。借用語には語末が*ii*で終わる語がある。

⁶ 原漢語では「司馬懿」だけだが、司馬懿は兵を率いているから満洲語訳では「司馬懿の兵」となっている。

⁷ 『満文三国志』の20巻67丁表。原漢語は、『三国志通俗演義』人民文学出版社(1974)の影印によるものである。キーワード前後文脈つき索引の作成に、KIS(株)漢字情報サービスの木村展幸氏の作成したプログラムKisKwic for Windowsを用いた。『満文三国志』の電子化コーパスは全24巻中約1巻分が筆者の入力、残りは早田輝洋氏の入力による。

⁸ これは、このような(後代の規範と異なる)綴りをした話者の言語に語末で*n*と*ng*(*ng*で終わる語は殆どが明らかな借用語である)の音韻論的対立が無かった事を示唆するものである。

①連体用法（狭義の属格用法）

音形のある格標識としては唯一の連体修飾標識として様々な意味関係で用いる。

- (3) lioi·bu -i gida
 呂・布 -i 槍（戟）
 「呂布の戟」
 原漢語：呂布手中戟 02057b
- (4) wehe -i sejen
 石 -i 車
 「石の車（石を発射して敵を攻撃する車）」
 原漢語：發石車 06074b
- (5) muke-i cooha
 水 -i 軍
 「水の軍（水軍）」
 原漢語：水軍 02037b
- (6) sele-i sejen
 鉄 -i 車
 「鉄の車（鉄を材料とする車）」⁹
 原漢語：鐵車 19059a

②連用用法（具格標識）

手段、動作の様態などを表す。

- (7) loho -i saci-ci.¹⁰ gida -i
 刀 -i 斬る -COND.CONV¹¹ 槍 -i
 toko-ci inu da-rakū.
 刺す-COND.CONV もまた 関与する-IMPF.NEG
 「刀で斬っても、槍で突いても刃が通らない。」
 原漢語：刀砍鎗刺亦不能入。 18081b

⁹ このような NP₁ 属格形 + NP₂ において NP₁ が主要部 NP₂ の材料である用法は、モンゴル語ハルハ方言には見られないが、モンゴル語ホルチン方言については、「紙（という材料）の飛行機」を言うのに属格の表現が使える」（風間 2013: 257）という報告がある。ホルチン = モンゴル族はモンゴル民族の中では最も早い時期に清朝の支配下に入った人々である。一部のモンゴル系言語の属格形の用法は満洲語の影響を受けている可能性がある。

¹⁰ 満洲語のパンクチュエーションは頻繁に用いられるものが二種類ある。小さな切れ目を一つの点（カンマで転写）で、大きな切れ目を二つの点（ピリオドで転写）で表す。文末でなくても二つの点で区切られることもあり、必ずしも英語のカンマおよびピリオドとは対応しない。文献によっては二つの点よりもさらに大きな切れ目を四つの点で表す場合がある。

¹¹ 本稿で用いる略号は次の通り。1: 一人称, 2: 二人称, ABL: 奪格, ACC: (定) 対格, ADN: 連体形, CAUS: 使役, CONCL: 終止形, COND: 条件, CONV: 連用形, COP: コピュラ, DAT: 与格, EXCL: 除外, FN: 形式名詞, IMP: 命令, IMPF: 未完了, INCL: 包括, NEG: 否定, NOM: 主格, NP: 名詞句, PERF: 完了, PL: 複数, Q: 疑問, SG: 単数

- (8) cuwan baksan -i faida-fi
 船 隊 -i 並ぶ -PERF.CONV
 「船は隊をなして並び…」
 原漢語：戰船，各分隊伍。 13015a
- (9) ere-ci tulgiyen liobei bi yargiyan -i sa-rkū.
 これ-ABL 以外 劉備 1.SG.NOM 本当 -i 知る-IMP.FNEG
 「これ以外は，わたくし劉備は，本当に知りません。」
 原漢語：捨此之外。備實不知。 05007a

③主語用法（属格主語）

従属節のうち，動詞連体形または形容詞で終わる連体節の主語は -i で表す事がある。属格主語の（すくなくとも）一部は主格（絶対格）形——すなわち (10) の li·žu 「李儒」の様に格標識無しの形——と交替可能であるように見える。

- (10) li·žu ebše-me dosina-ra-ngge
 李・儒 慌てる-IMP.F.CONV 入る-IMP.F.ADN-FN
 dungdzo -i tuci-re-ngge juwe nofi
 董卓 -i 出る-IMP.F.ADN-FN 二 人
 karca-fi dungdzo na de tuhe-ke.
 ぶつかる-PERF.CONV 董卓 地 DAT 倒れる-PERF.ADN
 「李儒が慌てて入って来ると，董卓の出て来るの（の），二人が激突して董卓が倒れた。」
 原漢語：儒急奔入。正撞董卓倒於地上。 02058a

次の，(11)，(12) は，従属節内に直接目的語がある例¹²である。早田清冷（2013）では (11) のように属格主語の前に対格目的語が出ている例があることは指摘していたが，(12) の通り属格主語の後に対格目的語が出ている例も同様に存在する。

- (11) jang·fei be fan·ciyang, jangda -i
 張・飛 ACC 範・彊 張達 -i
 wa-ha be donji-fi.
 殺す-PERF.ADN ACC 聞く-PERF.CONV
 「張飛を，範彊と張達が殺したのを聞いて…」
 （対応する原漢語なし） 17009b
- (12) dung·dzo -i han be gidaša-ha-ngge
 董・卓 -i 帝 ACC 欺く-PERF.ADN-FN

¹² 日本語では，このような場合，従属節の主語の格標識に「が」の代わりに「の」を用いると許容度が低くなる。このような場合に「の」が使えない事は Watanabe (1996) 等で日本語の統語上の制約とされているが，満洲語には，そのような制約は無い事になる。

gemu li·žu kai.
皆 李・儒 だぞ

「董卓が帝を欺いたのも皆、李儒が（欺いたの）だぞ。」

原漢語：今董卓欺君者，皆李儒也。

02068b

動詞連体形で終わる連体節の主語と形容詞で終わる連体節の主語の他に -i の主語用法があるとは従来認められていない。属格をとる主語について、津曲（2002: 86-87）は（13）の様述べる（例文は出典表記を省略し例文番号と満洲語のローマ字表記を変更して引用する）。

(13)¹³ 種々の従属節のうち、連体法の動詞 -rA, -hA（まれに形容詞）がそれぞれ、

- ①名詞にかかる連体修飾をなしている場合 **[i]**¹⁴,
- ②それ自身で名詞節を作っている場合 **[ii]**,
- ③名詞化接尾辞 -ngge をとって名詞節を作っている場合 **[iii]**,

その主語は属格をとりうる。【中略】

- [i]** han -i takūraha elcin
皇帝が遣わした使者
- [ii]** irgen -i bucere be gosirakū ofi
民が死ぬのを哀れまないの
- [iii]** 【前略】 sin-i tacihangge udu aniya oho.
おまえが学んだのは何年になったか

主語が属格形で現れ、音声形（表音文字である満洲文字による表記に現れた表層形を本稿ではこう呼ぶ。もちろん厳密には音声とも音素とも異なる）において名詞述語で終わっている従属節があるという主張は管見に入らない。これに対して、満洲語には（13）で述べられたような従属節のみならず、コピュラ連体形が発音されずに、音声形では「属格主語、名詞述語終わり」となる従属節も認めるべきであるというのが本稿第2節で行う主張である。

1.3. 「同格の属格」

1.2.2 節で見たとおり、-i は様々な意味関係の連体修飾に使用可能である。だが、それだけの範囲ならば単に「連体修飾を表す」と一般化して説明できる。

問題なのは、一方を他方の連体修飾要素とする必要が無いように見える用法である。満洲語には同じものを指す二つの名詞句の連続でも第一名詞句が属格になる用法がある。

¹³ なお、-ngge を早田輝洋（2011）に従い形式名詞と考えたと①と③は同じ物という事になるし、②も -ngge と交替しうるゼロ形式名詞を認めれば、3つはすべて同じものとして一般化が可能である。本稿ではこのゼロ形式名詞を認めて記述を行う。

¹⁴ 【】内は筆者が新たに加えたものである。以後同様。

- (14) dobori dari kemuni li·fung jang·ji hiya·heo·hiowan -i
 夜 ごと ずっと 李・豊 張・緝 夏・侯・玄 -i
ilan nofi ergen be tooda-me gaji
 三 人 命 ACC 返す-IMPF.CONV くれ¹⁵
 se-me jide-re be sabu-mbi.
 言う-IMPF.CONV 来る -IMPF.ADN ACC 見える -IMPF.CONCL
 「毎晩ずっと李豊，張緝，夏侯玄の三人が命を返してくれと言いに来るのが
 目に映る。」
 原漢語：毎夜只見李豊，張緝，夏侯玄，三人索命。 22077a
- (15) syma·joo -i jalingga kiyangkiyan
 司馬・昭 -i 奸な 英雄
 ts'oots'oo ci daba-habi.
 曹操 ABL 超える-PERF.CONCL
 「奸雄の司馬昭は曹操を超えている。」
 原漢語：司馬昭姦雄過於曹操。 23068a

Doerfer (1962: 48), 早田輝洋 (2005: 128), 早田清冷 (2013) 等で、この様な例は「同格」(Doerfer 1962 では Apposition) であると扱われてきた。一方の名詞句が、それがもう一方の名詞句の所有者である場合(すなわち典型的な属格の用法)と同じ形態論的操作を受けている点で、「同格の属格」は(16)のようなアルタイ諸言語に一般的に見られる名詞句の併置による「同格」と異なっている¹⁶。

- (16) sakda niyalma bi
 老いた 人間 1.SG.NOM
 「老人の私(直訳：老人，私)」
 原漢語：老夫 03018b

「NP₁であり、かつ NP₂でもあるモノ(人・物)」を「NP₁属格形+ NP₂」なる形で表すことが可能な言語は、管見の及ぶ範囲では、現代シベ語を含む広義の満洲語以外の狭義のアルタイ諸言語において報告されていない。

¹⁵ この語はおそらく動詞 gaji-「持って来る」と関係があるが、早田輝洋(1993: 112)は「gaji と gaju は等しく、共に gaji- の命令形だとしている辞書が殆どであるが、正しくない。【中略】少なくとも共時的には、gaji- の命令形は gaju であり、gaji は意味がずれている」と述べる。

¹⁶ Shibatani (2013) では、日本語のいわゆる格助詞の「の」も、いわゆる形式名詞の「の」も共に体言化を行うものであるという。この考えでは1.4.2節で後述する「コレラ患者の大学生」(西山2003)は2つの体言「コレラ患者の」と「大学生」からなるという解釈になる。『満文三國志』の満洲語の場合、格標識 -i には新たな名詞語幹を作る用法および日本語の形式名詞や補文標識の「の」にあたる用法は無いから、この共時態で -i を体言化標識であると解釈する根拠は無い。

1.4. 「同格の属格」という記述の問題点

以下では「同格の属格」なる従来の記述の問題点について述べる。

1.4.1. 属格の用法としての「同格」の定義不足

第一に、属格の用法における「同格」の定義が不明である事が問題である。Doerfer (1962: 48), 早田輝洋 (2005: 128), 早田清冷 (2013) は、満洲語の「 NP_1 $-i$ + NP_2 $_i$ 」($_i$: 同一指示) という形で実現する構造における $-i$ の用法を「同格」であると説明しているが、(所有格のような) 狭義の属格とは異なる「同格」の属格であるという以外には「同格の属格」なるものに関する詳細な定義も説明も行われていない。従属部と主要部が同一指示で、広義の「所有関係」とは言い難いものが「同格」として挙げられているだけである。典型的には「同格」は亀井他編 (1996: 978) に「ある名詞が他の名詞と単に(何らかの機能語をおかずに) 併置 (coordinate) され、その名詞の意味を限定する」とあるような、印欧語に一般的に見られる統語論的にはっきり定義できる現象を言うが、この定義であると従属部に主要部との格の一致ではない属格標識が現れた時点で「単に併置」ではないから「同格」などではあり得ない事になる¹⁷。早田輝洋 (2005: 128) は、同格の属格について、*men-i* (1.PL-*i*) *ahūn deo* (兄弟)「我々兄弟」は「{我々の{兄や弟}}という「所有の属格」と構造としては同じものなのかも知れない」と述べるが、同じと解釈するほうが好ましいとは主張されておらず、「同じものなのかも知れない」という根拠も挙げられていない。「同格の属格」が名詞句間の意味関係が違うだけで「所有の属格」と同じ統語的機能のものなのか、狭義の属格とは統語的機能も異なるものなのか、従来の記述ではどちらであるとも述べられていない。

1.4.2. 現代日本語のコピュラ連体形「の」とは異なる

第二に、満洲語の「 NP_1 $-i$ + NP_2 $_i$ 」及び、それに似た構造・用法を持つ他言語の表現が、いずれも「同格の属格」という名称で呼ばれる事があるが、それらの性質は同一ではなく、より厳密な記述を要する、という問題がある。特に、満洲語の「 NP_1 $-i$ + NP_2 $_i$ 」は、定の名詞句の位置を見る限り、例えば日本語の「同格の属格」とは本質的には同じ現象とは思えず、「同格の属格」という範疇の一般言語学的な有効性に疑問がある。以下、この事を説明する。

日本語でも、所有関係を表す「 $[NP_1 + 属格標識] + NP_2$ 」と一見して同じに見える構造が、 NP_1 と NP_2 が同一指示でも高い生産性で用いられる¹⁸。しかし、満洲語の「同格の属格」は語順に特徴があり、定の名詞句が第一名詞句になる傾向がある。早田清冷 (2013) に指摘があるように、日本語の類似の現象とは語順が逆であ

¹⁷ この定義では英語の *the two of us* も日本語の「妹の花子」も「同格」ではなくなる。

¹⁸ 日本語の「の」と満洲語の $-i$ の組織的な対照研究は今後の課題とし、ここではこのような「同格の属格」*appositive genitive* と呼ばれる現象に限定して、定の名詞句の位置に関わる問題について対照する。

る。これはこの現象の本質に関わる重要な相違点である。

現代日本語および古典日本語の記述において、従来は助詞であるとされてきた「の」の一部を「コピュラの連体形」であるとする解釈が日本内外の少なくない研究者に採用されている。時枝（1950: 183, 1954: 92）はこの立場であり助動詞の連体形としての「の」を認める。西山（2003）も現代日本語について連体助詞の「の」とは別に、それとは異なる統語機能を有するもう一つの「の」を認める。西山（2003: 16-43）の説明では「コレラ患者の大学生」の「の」はコピュラの連体形「デアル」に相当する形式で、連体助詞である「洋子の首飾り」の「の」とは前後の名詞句間の意味関係のみならず「NP₁のNP₂」の基底形における統語構造からして全く異なるという。さらに、このようなNP₁について「[NP₁デアル]という叙述的な意味をもつ」（西山 2003: 21）がゆえに「NP₁デアルNP₂」タイプではNP₁の位置に、叙述性を持たない定の名詞句が現れることは許容しがたいと主張する。

- (17) ?この患者の大学生
 ?あいつの政治家
 ?君の俳優
 ?山田洋子の音楽家 (西山 2003: 21, 許容度も西山による)

確かに、このような「の」は語順の制約においてコピュラの連体形「デアル」と同様な特徴を有しているようだ。筆者の内省では（17）の例は第一名詞句と第二名詞句が別人（所有関係）の読みでない場合は語順を逆にして定の名詞句を第二名詞句にしないと許容し難い。語順を逆にした場合「の」は「である」に置き換えることができるが、（17）の語順のままだと「の」を「である」に置き換えても不自然である。

(17)'

[大学生]	{ の である}	[この患者]	?[この患者]である[大学生]
[政治家]	{ の である}	[あいつ]	?[あいつ]である[政治家]
[俳優]	{ の である}	[君]	?[君]である[俳優]
[音楽家]	{ の である}	[山田洋子]	?[山田洋子]である[音楽家]

しかし、満洲語の「NP₁であり、かつNP₂でもあるモノ」を表す「NP₁_i-i + NP₂_i」は筆者の管見の及ぶ範囲では、ほとんどの例でNP₁が定の名詞句である。特に以下のようにNP₁が人称代名詞である例が多い。これらの-iがコピュラの連体形であるとは考えられない。

- (18) jiyangjiyūn ai turgun de
 将軍 何の 理由 DAT
min-i sakda niyalma be wakala-mbi.
 1.SG-i 老いた 人間 ACC 咎める -IMPF.CONCL
 「将軍は何故、老人の私を咎めるのだ。」
 原漢語：将軍何故反怪老夫耶。 02051b

(18) でも意味を考えて和訳はコピュラの連体形「デアル」に相当する「の」を用いて「老人の私」(=老人デアル私)としたが満洲語の語順は「私の老人」であることに注意されたい。日本語の「私の老人」は「私」と「老人」を同一指示とする読みでは通常は非文となる¹⁹。以下、(19)～(22)の例も、もとの満洲語の語順のまま、満洲語の属格標識-iを「の」と直訳すると日本語で同一指示の読みは困難である。

- (19) ai ai weile be men-i hehe niyalma de
 何 何 事 ACC 1.PL.EXCL-i 女 人間 DAT
 ainu fonji-mbi.
 何故 尋ねる -IMPF.CONCL
 「なんでもかんでも、女の私達にどうして尋ねるのですか？」
 原漢語：凡事不必問俺女流。 05063a

この(19)は関羽の発言に対する甘夫人と糜夫人の二人の発言である。

- (20) muse-i ahūn deo ilan niyalma
 1.PL.INCL-i 兄 弟 三 人間
 abka-i fejergi de hetu undu yabu-me, cooha-i
 天-i 下 DAT 横 縦 行く -IMPF.CONV 兵-i
 erdemu be bodo-ci we de isi-rakū.
 才 ACC 思う -COND.CONV 誰 DAT 及ぶ -IMPF.NEG
 「我々兄弟三人は天下を馳せ巡り、武芸に関しては誰にも負けない。」
 (直訳：…武芸を考慮したなら、誰に及ばないか?)
 原漢語：俺兄弟三人、縦横天下、論武藝 不如誰。 08038b

この(20)の例は張飛の発言である。「我々」の属格形 musei も「兄弟三人」ahūn deo ilan niyalma も両方とも発話者である張飛と聞き手である劉備、関羽の合

¹⁹ 無理に「私のおいぼれ」と訳せばこの語順で日本語でも許容できる。日本語でも NP₂ が一部の罵倒表現である場合は例外的に NP₁ を人称代名詞(人称名詞)とする語順が可能であるが、満洲語の sakda「老いた、老成した」は良い意味でも使われる語であり、(18)の例は老人が若者に対して事実を述べている様にしか見えない。NP₂ は(21)の様な明らかに NP₁ を罵倒する表現もあるが(19)の様な「女性である」という事実、(20)、(22)の様な「三人兄弟である」という事実を述べるだけの例も可能である。

計三人を指す。

- (21)

bi	enenggi	<u>sin-i</u>	aha	-i	baru	
1.SG.NOM	今日	2.SG-i	奴隸	-i	対して	
ete-re	anabu-re		be		bolgo-mbi.	
勝つ -IMPF.ADN	負ける -IMPF.ADN		ACC		明確にする -IMPF.CONCL	

 「私は今日、奴隸（つまらない男）のお前と勝敗を決する。」
 原漢語：吾今日與匹夫須決勝負。 15077a
- (22)

suwen-i	ahūn	deo	<u>ilan</u>	niyalma	
2.PL-i	兄	弟	三	人間	
gemu	cenghiyang		be	ama	-i gese weile.
皆	丞相		ACC	父	-i 如く 仕える .IMP

 「おまえたち兄弟三人は皆丞相に父のように仕えなさい。」
 原漢語：爾兄弟三人皆以父事丞相。 17082b

「同格の属格」という範疇は、定義が曖昧かつ少数の言語にしか見られない。また、日本語と満洲語の両言語にも本質的に同じものが存在するとも思えない。属格形の用法としての「同格」という用語は用いずにここに示した現象を記述できるならばその方が望ましいと言える。

1.5. 本稿の立場

「同格」という用語の定義の混乱を避けるために次節以降では、単に「同格」なる語は用いずに以下の通り定義された二語を用いる。

- ・ 同格の属格：「NP₁であり、かつ NP₂でもあるモノ」を指す「NP₁_{i-i} + NP₂_i」
 (: 同一指示) という形で実現する構造における属格標識 -i の用法、すなわち満洲語のいわゆる「同格の属格」を本稿でも同じ名称で呼ぶ。
- ・ 狭義の同格：同一指示の名詞句の単なる併置を「狭義の同格」と呼ぶ。cf. (16)

なおこれらは本稿の議論のための定義である。一般言語学的な用語として「同格の属格」および「狭義の同格」なる概念に対する厳密な定義を提供する目的のものではない点に注意されたい。

本稿はまず、「同格の属格」の解釈以前に、満洲語においてコピュラの連体形がゼロ（音形なし）になる場合がある事を示す（第 2.1 節）。さらに、従属節においてゼロコピュラの主語も他の動詞の主語同様属格形で現れうる事を示す（第 2.2 節）。最後に、満洲語に主要部内在型関係節があることから、「同格の属格」は、主語用法（属格主語）であると主張する（第 3 節）。

2. ゼロコピュラと属格主語

2.1. コピュラの未完了連体形

早田輝洋 (2006: 36) は「A=B を表す繫辞文は、無標的な未完了肯定終止形では通常繫辞無しであるが、それ以外の形には繫辞が必須である」と述べる。ここで述べられている「繫辞 (コピュラ) が必須」および「繫辞無し」とは、発音される繫辞が有る、無い、ということである。早田輝洋 (2006) の主張に基づく満洲語の動詞 bi- は以下のように現れる事になる。コピュラの未完了連体形 bisire と完了連体形 bihe はゼロにならず必ず音声として発音されると言う。

表1 早田輝洋 (2006) の主張に基づく満洲語の動詞 bi- の音声形

	存在動詞 (無標)	存在動詞 (有標)	A=B を表すコピュラ
未完了終止	bi	bimbi	∅-bi (bi は稀である)
完了終止	bihe ²⁰ -bihebi	bihe-bihebi	bihe-bihebi
未完了連体	bisire	bisire	<u>bisire</u>
完了連体	bihe	bihe	bihe

これに対して、本節では少なくとも名詞を述語とするコピュラ文が連体節になる場合にコピュラ bi- の未完了連体形、すなわち、表1の下線を引いた bisire は、通常はゼロになる事を示す²¹。まず、ゼロコピュラに関わる議論に入る前に、形容詞と名詞の区別が満洲語に認められることを確認しておこう。

2.1.1. 形容詞と名詞の区別

満洲語において形容詞と名詞の形態論上の違いは、ほとんど存在しない。Gorelova (2002: 145) の様に、形容詞という品詞を認めずに両方とも名詞 (noun) とする立場もある。しかし、Gorelova はモノを表さない「質を表す名詞」(nouns of quality) を認めており、これが形容詞と名詞を認める記述における形容詞に相当する。いずれにせよ満洲語にモノを表す体言と、モノを表さずに属性だけを表すことができる体言が存在し、両者が統語上異なる振る舞いをする事は知られている。品詞が違うと説明するのか、同じ品詞だが意味が違うと説明するのかは別として、両者が分類可能である事自体を否定する主張は無い。形容詞と名詞の違いについては既に様々な現象で違いが言われているが筆者が特に顕著だと考えるのは、

- ① 属性を表す体言 (形容詞) を述語とする文は (モノを表す体言 (名詞) を述語とする文と異なり) 否定要素に waka 「～ではない」が用いられない事
- ② 人称代名詞が連体修飾を受けられないことが原因で、「形容詞+人称代名詞」

²⁰ 満洲語は (現代日本語などと同様) 連体形に終止用法がある。

²¹ 形容詞の後ろに現れる補助動詞的な bi- をコピュラとするか存在動詞とするかという問題には本稿は立ち入らない。

なる名詞句は不可能だが、名詞句が併置される事（狭義の同格）は可能なので「名詞（句）+ 人称代名詞」という名詞句は可能である事

の二点である。

① 形容詞述語文と名詞述語文の否定

形容詞述語文を否定すると否定要素として akū が用いられる。

- (23) wa-ci sain akū.
 殺す -COND.CONV 良い NEG
 「殺すと良くない。」
 原漢語：殺之不祥。 02093a

コピュラ文の否定、すなわち名詞述語を「～ではない」と否定すると次のように否定要素として waka が用いられる。

- (24) tere diyocan waka²² o-ci we.
 あれ 貂蟬（人名） NEG なる -COND.CONV 誰
 「あれが貂蟬でないならば、誰だ？」
 原漢語：非蟬何。 02052a

これは固有名詞だが、一般名詞も同様である。「男」である事を否定すると以下の通り否定要素は waka になる。

- (25) burla-ha niyalma haha waka
 逃げる -PERF.ADN 人間 男 NEG
 「逃げた人間は男ではない。」
 原漢語：走的不算男子漢。 03103b

② 連体修飾と併置

満洲語は日本語と違い人称代名詞が直接は連体修飾を受けられない。例えば、日本語では「年老いた私」のように人称代名詞に相当する名詞（人称名詞）である「私」が問題無く連体修飾を受けられるが、満洲語では（26）の様に人称代名詞を属格形にして前置するか、（27）の様に人称代名詞以外の語を修飾した上で、人称代名詞と併置する（狭義の同格）といった、別の方法を採らなければならない²³。

²² 名詞 + waka 「ではない」で waka の代わりに akū を用いると「亡い、無い」といった存在の否定となりコピュラの否定ではなくなる。

²³ 動詞連体形も人称代名詞を修飾できない。「死ぬ私」も以下の通り他の手段を用いる。

min-i	buce-re	beye	be
1.SG-i	死ぬ-IMPF.ADN	身体 / 自分	ACC
tere	wa-ha	akū	guwebu-he.
それ	殺す-PERF.ADN	NEG	許す-PERF.ADN

- (26) = (18) min-i sakda niyalma be
 1.SG-i 老いた 人間 ACC
 「老人の私（直訳：私の老人）を」
 原漢語：老夫
- (27) = (16) sakda niyalma bi
 老いた 人間 1.SG.NOM
 「老人の私（直訳：老人，私）」
 原漢語：老夫

このように、形容詞 sakda 「老いた」は人称代名詞の前に出現して人称代名詞の特徴を述べることが出来ないが、名詞句 sakda niyalma 「老いた人間」は (27) の様に、人称代名詞の前の位置に文法的に同じ資格のものを併置する形で出現することが可能である。

2.1.2. 動詞 bi- の未完了連体形の出現度数

コピュラ（繫辞）文が「無標的な未完了肯定終止形では通常繫辞無しであるが、それ以外の形には繫辞が必須である」（早田輝洋 2006: 36）ならば、名詞 B を述語とする表現 a. 「(A が) B である」と b. 「(A が) B であった」は、それぞれ、

- (28) a. (A (-i)) B bisire 「(A が) B である」
 b. (A (-i)) B bihe 「(A が) B であった」

という形で現れなければならない。(28) の bisire, bihe がゼロになってはならないはずである。

確かに (28b) は用例がある。「名詞+コピュラ完了形 bihe」は、名詞を連体修飾する形でも、主文末でも、連体節末でも用いられる。

(29) 連体修飾

daci hafan bi-he niyalma
 元々 役人 COP-PERF.ADN 人
 「元々役人だった人」

原漢語：原任官員吏典

15099b

(30) 主文末 ([] 内が直接引用文で、この文を終止する位置に bihe がある)

[bi daci su gurun -i jiyangjiyün bi-he]
 1.SG.NOM 元々 蜀 国 -i 將軍 COP-PERF.ADN
 se-me
 言う-IMPF.CONV

「死ぬ（はずの）私（直訳：私の死ぬ身）を、彼は殺さずに見逃した。」
 原漢語：我本死的人。他不忍殺害。 11045a

- 『私は元々蜀の將軍だった。』と言い…」
 原漢語：曰。我本是蜀將。 19070b
- (31) 連体節末 ([] 内が連体節)
 [we bi-he] Ø sa-rkū.
 誰 COP-PERF.ADN FN 知る -IMPF.NEG
 「誰だったのか知らない。」
 原漢語：不知何人也。 12061b

問題は早田輝洋(2006: 57)でコピュラ bi- の未完了連体形とされる bisire である。『満文三国志』において動詞 bi- の未完了連体形 bisire は表 2 のとおり 742 例あるが、

表 2 『満文三国志』中の bisire, bihe

句中における bisire/bihe の先行要素	bisire	bihe
名詞 ²⁴ 語幹 + 対格 (対格主語)	2	0
名詞語幹 + 与格	96	47
名詞語幹 + 属格 (属格主語)	36	1
名詞主格形 (主語)	bisire/bihe は存在動詞	
名詞主格形 (述語)	bisire/bihe はコピュラ	
形容詞	23	94
副詞	27	30
動詞	443	614
なし	7	0
合計	742	1333

そのうちの名詞主格形 + bisire 108 例は、全て (32) の様な存在動詞「ある、いる」である。bisire がコピュラ「デアル」として用いられている例は見つからない。

- (32) min-de sakda aja bisi-re be sa-fi.
 1.SG-DAT 老いた 母 いる -IMPF.AND ACC 知る -PERF.CONV
 「私に老母がいるのを知って…」
 原漢語：知我有老母也。 06012a

本資料で名詞主格形の後でコピュラの bisire が出ないのは偶然ではありえない。実際、「(何か) NP デアル事を識別する (taka-)」あるいは「(何か) NP デアル事を知る (sa-)」という表現において「デアル」にあたる音形のある要素は現れていない。(33) の例は最初に人の姿を見た呂布が、その人物を貂蟬だと認識する

²⁴ この表でいう「名詞」は一般に疑問詞、代名詞とされる体言も全て (合計 10 例) 含む。

場面である。原漢語で「是」が用いられているとおりに「貂蟬である」事を「知る」節である。満洲語では diyocan「貂蟬」と対格標識 be の間に bisire は現れていない。

- (33) lioi·bu, diyocan Ø Ø be taka-fi
 呂・布 貂蟬 COP FN ACC 識別する -IMPF.CONV
 「(入り口の簾の中に一人の人が行ったり来たりして、顔を半ば出して外へ気を引くように見ている。) 呂布は (その人が) 貂蟬であると分かり…」
 原漢語：布知是貂蟬。 02053a

次の (34) は所属が不明な兵が来た事を述べている。文脈上、「誰の兵を知らないのか?」とコピュラ文ではない解釈をして読むことは不可能である²⁵。cooha「兵」と対格標識 be の間に bisire は現れていない。

- (34) we -i cooha Ø Ø be sa-rkū.
 誰 -i 兵 COP FN ACC 知る -IMPF.NEG
 「(それが) 何処に所属する兵であるかを知らない。」
 原漢語：不知何處兵来。 14089a

次の (35) は魏の国の将である張普が目の前の兵を敵だと思わずに近づいていく場面である。文脈上「敵である呉の兵というものを知らなかった」とは解釈できない。見えている兵が「呉の兵である」のを知らなかったのである。しかしここでも、cooha「兵」と対格標識 be の間に bisire は現れていない。

- (35) jang·pu u gurun -i cooha Ø Ø be sa-rkū
 張・普 呉国 -i 兵 COP FN ACC 知る-IMPF.NEG
 「張普は、(それが敵の) 呉の兵であると気付かず… (そのまま近づいて尋ねたところ、呉の将である朱桓に斬りつけられて落馬した。)」
 原漢語：普不知是呉兵。 20017a

次の (36) でも漢語のコピュラ「是」が満洲語ではゼロの形に訳されている。sin-i-ngge「汝のもの」と対格標識 be の間に bisire は現れていない。

- (36) emu tanggū susai morin be duri-he
 一 百 五十 馬 ACC 奪う -PERF.ADN
 mujangga, sin-i-ngge Ø Ø be sa-hakū.
 その通りだ 2.SG-i-FN COP FN ACC 知る -PERF.NEG
 「150の馬を奪ったのはその通りだ。汝のものであるのを知らなかった。」
 原漢語：是吾奪了好馬一百五十匹。不知是你的。 04013a

²⁵ やはり文脈上、「誰が兵であるかを知らない」とも読めない。

コンピュータの未完了連体形は名詞の後に通常²⁶はゼロになると考えられる。

2.2. ゼロコンピュータの属格主語

本節ではゼロコンピュータの主語も属格になることを示す。

(37) では、前節で見たゼロコンピュータの主語が属格形で出現している。

- (37)

ts'oots'oo	-i	han	be	gidaša-ra,				
曹操	-i	帝	ACC	欺く -IMPF.ADN				
dergi	be	akū	ara-ha	hūlha	Ø	Ø	be	
上	ACC	無い	する -PERF.ADN	賊	COP	FN	ACC	
si		sa-rkūn.						
2.SG.NOM		知る -IMPF.NEG.Q						

「曹操が帝を欺く、上を蔑ろにした賊である事をおまえは知らないのか？」
 原漢語：必識曹操欺君罔上之賊。 08019a

訳文の下線部は、原漢語では「曹操」が主語で「欺君罔上之賊」が述部である。偽の手紙を読んで劉備に仕えるのをやめて曹操の所へ来た徐庶を母親が「曹操は悪人なのに何故そのような事をした」と非難する場面である。徐庶はすでに曹操を知っており言葉も交わしている。この文は、「帝を欺く、上を蔑ろにする賊の曹操を、おまえは知らないのか」だと解釈するよりも、「曹操が、帝を欺く上を蔑ろにする賊である事」を、おまえは知らないのか」だと考えた方がよい。-iは連体節におけるゼロコンピュータの属格主語を表している。

- (38)

bi	daci	sakda	jiyangjiyūn	-i	jalan	de
1.SG.NOM	元々	老いた	將軍	-i	時代	DAT
unenggi	haha	Ø	Ø	be	sa-ha	bi-he
真に/の	男	COP	FN	ACC	知る-PERF.ADN	いる-PERF.ADN

「我はもとより、老將軍が当世にて本当に男であるのを知っている。」
 原漢語：吾素知老將軍乃世之真丈夫。 13052a

(38) も同様に属格主語の例であると考えられる。張飛が、この時点では敵で、以前からの知り合いではない老將軍である嚴顔に対して発言している。下線部が指しているのは「老將軍が当世にて本当に男」であるという事実である。与格形 jalan de「時代にて」は連体修飾は不可能な形式である。連体節にあって jalan de が副詞的に振る舞っていると考えればこの例文は最も自然に解釈できる。

従来の記述ではここに挙げた様な従属節の存在は認められていなかったが、「NP₁

²⁶ コンピューラの未完了連体形が必ずゼロであるのか、資料に用例が出ていないだけで実際には稀に bisire も用いられるのかは不明である。しかし、コンピュータの未完了終止形が稀には bi で現れることを考えるとコンピュータの未完了連体形だけが必ずゼロという体系は考えがたい。本稿では「必ずゼロになる」とは考えずに「通常はゼロになる」と考えることにする。

がNP₂である(事)」を表す「NP₁-i NP₂+ゼロコピュラ」(+ゼロ形式名詞²⁷)という従属節は満洲語に存在すると考えなければならない。

3. 「同格の属格」もゼロコピュラの主語用法である

3節では、満洲語に頻繁に見られる、いわゆる「同格の属格」も属格形の主語用法であることを主張する。「NP₁であり、かつNP₂でもあるモノ」を表す「NP₁-i + NP₂」で、NP₁が叙述性の低い「定の名詞句」であるという語順は前節で見た「NP₁がNP₂である事態」を表す連体節の語順と同じである。「同格の属格」もゼロコピュラの属格主語だと考えれば、この構造に見られる語順を説明することができる。

3.1. 一般的な従属節の属格主語として説明できる例

2.2節で「NP₁-i NP₂+ゼロコピュラ」という従属節があることが示された。この時点で既に従来の考えに従って「同格の属格」とした用例の中には従属節の主語である可能性が生じている用例がある。(39)の例がそれである。

(39) = (15)	syma·joo	-i	jalingga	kiyangkiyan
	司馬・昭	-i	奸な	英雄
	ts'oots'oo	ci	daba-habi.	
	曹操	ABL	超える	-PERF.CONCL
	「 <u>奸雄の司馬昭は曹操</u> を超えている。」			

別の解釈：[[syma·joo -i jalingga kiyangkiyan Ø] Ø]...

司馬・昭 -i 奸な 英雄 COP FN

「司馬昭が奸雄である事は曹操(が奸雄である事)を超えている。」

音声形で属格主語をもちながら名詞述語終わりである従属節は無いという従来の前提では上の下線部は「司馬昭であり、よこしまな英雄である」モノを表す名詞句と解釈されたが、本稿のこれまでの議論により「司馬昭が、よこしまな英雄である」という事態を指す従属節であると解釈できる。それならば、この-iは主語用法である。音声形において「同格の属格」の例と「NP₁がNP₂である事態」を表す属格主語の節は同じ形をしている。しかし、事態を表す節の主語用法であるというこの解釈では、「同格の属格」の用例の一部しか説明できない。「同格の属格」の用例の多くは(39)と異なり「NP₁がNP₂である事態」という解釈が明らかに不可能な文脈で用いられている例や、そのような解釈ができるか議論の余地があるものが多々存在する。

例えば、(40)は漢の大臣である王允による呂布に対する発言であるが、この発言は「王允が、既に貂蟬を呂布に与える約束していたのに董卓に与えてしまった事」

²⁷ 補文標識としても用いられる形式名詞(あるいは名詞化接辞)-nggeは非自立形式であり単独では発音されない。

を呂布が非難したのを受けて行われている。「王允が老人である事」を非難したわけではないから「將軍（呂布）は何故、私が老人である事を咎めるのだ」と解釈することは不可能である。

(40) = (18) jiyangjiyün ai turgun de
 將軍 何の 理由 DAT
min-i sakda niyalma be wakala-mbi.
 1.SG-i 老いた 人間 ACC 咎める -IMPF.CONCL
 「將軍は何故、老人の私を咎めるのだ。」

次の(41)の様な例も問題である。動詞 fonji-「尋ねる」の間接目的語、すなわち質問される人物は与格標識 de で表示されるから(41)の men-i hehe niyalma の部分は事態ではなくて人物を指していると考えた方が自然である。これを「NP₁が NP₂である事態」すなわち「私達が女である事」を指すと解釈すると、連体節+与格標識 de は動詞 fonji-「尋ねる」の間接目的語ではなくて、時間の限定という事になるが、この「私達」は常に「女性」なのだから「私達が女である時に質問する」という解釈は奇妙である。「私達が女であるのに（も拘わらず）質問する」という解釈が満洲語で可能ならば事態を指す解釈でも良いのだが、連体節+与格標識 de に時間や場所に限定されない、日本語のいわゆる接続助詞の「のに」にあたる用法があるかは不明であり、このような例文の説明の為だけにそれを認めるのは好ましくない。

(41) = (19) ai ai weile be men-i hehe niyalma de
 何 何 事 ACC 1.PL.EXCL-i 女 人間 DAT
 ainu fonji-mbi.
 何故 尋ねる -IMPF.CONCL
 「なんでもかんでも、女の私達にどうして尋ねるのですか？」

では、このような例（および(39)の下線部分が事態ではなくて司馬昭を指していた場合）における「同格の属格」はいかに解釈されるべきか。ここで重要なのは満洲語に「主要部内在型関係節」が存在するという事実である。

3.2. 主要部内在型関係節の属格主語として説明できる例

先述のとおり日本語では「NP₁であり、かつ NP₂でもあるモノ」を表す名詞句「NP₁の+ NP₂」は、NP₁が人称名詞である場合(42)は、極めて許容されにくい、人称名詞「私達」が先行していても、「NP₁の NP₂ デアルの」という「コピュラ連体形+の」が後置された形(43)であるならば、日本語でも許容度は上がる。

(42) a. *関羽將軍が、私達_iの女_iと相談する cf. (41)
 b. 関羽將軍が、女_iの私達_iと相談する

(43) 関羽將軍が, [私達_iの女_iであるの]と相談する

これは日本語の研究において Kuroda (1974, 1975・76, 1976・77) などで広く知られるようになった「主要部内在型関係節」と呼ばれる関係節である。表層形において「私達」が[]でくくられた部分の意味上の主要部になっている。そして満洲語も(44)～(47)の通り, 日本語の先ほどの関係節に類似の構造が可能な言語である事が知られている²⁸。

- (44) [ji·ping ni boo-de gene-re Ø] be
吉・平 -i 家 -DAT 行く -IMPF.ADN FN ACC
bi-bu-fi,
居る-CAUS-PERF.CONV
「[吉平が家に帰るの]をそのまま居させて…」
原漢語: 吉平辭去。承留住, 05040a
- (45) [ts'ai·dzung. ts'ai·ho -i holto-me
蔡・中 蔡・和 -i 偽る-IMPF.CONV
daha-ha-ngge] be bi-bu-fi.
投降する-PERF.ADN-FN ACC 居る-CAUS-PERF.CONV
「[蔡中と蔡和の偽装投降したの]を(騙されたふりをして)居させておいて…」
原漢語: 故留蔡中蔡和詐降之人 10013a
- (46) [niyalma -i buce-he-ngge] bihan de
人 -i 死ぬ-PERF.ADN-FN 野 DAT
jalu-kabi.
満杯になる -PERF.CONCL
「[人の死んだの]が野原に満ちた。」
原漢語: 殺人遍地。 07051a

ここまでの3例は動詞述語の例であった。次に示すのは形容詞述語の例である。満洲語の形容詞が名詞と同じく体言であって名詞によく似ていることは既に述べた。

(47) の例は「同格の属格」の用例によく似ている。

²⁸ Kubo (1985) は, 満洲語の主要部内在型関係節について, 主要部が関係節中の目的語であり主文中の主語である (o-S) タイプ, 主要部が関係節中の主語であり主文中の主語である (s-S) タイプ, 主要部が関係節中の主語であり主文中の目的語である (s-O) タイプの三タイプを報告している。主要部が関係節中の目的語であり主文中の目的語であるタイプ (Kubo の書き方に従うと o-O) は報告されていないが, 以下のとおり存在するので報告しておく。

[ere nirugan niru-ha Ø] be si tuwa-me ara
この 絵 描く-PERF.ADN FN ACC 2.SG.NOM 見る-IMPF.CONV 作る.IMP
「私が描いたこの(兵器の)絵(直訳: この絵を描いたの)を汝が見て作れ。」
原漢語: 皆畫成圖本。汝可如法造之。 21064b

- (47) [lio·fung, meng·da -i doro akū Ø]
 劉・封 孟・達 -i 道 無い FN
 be wa-ha se-me ele-rakū.
 ACC 殺す -PERF.ADN 言う -IMPF.CONV 満足する -IMPF.NEG
 「[劉封, 孟達の礼無き] を殺したとて (私は) 満足できない。」
 原漢語: 劉封, 孟達, 如此無禮。罪不容誅。 16037a

音形のある動詞述語と形容詞述語の両方の場合において表面的に日本語の「主要部内在型関係節」に類似した従属節が有る以上、音形が無いゼロコピュラでも同様の従属節があることは不思議な事ではない。満洲語に頻繁に見られる「定の名詞句 NP₁ 属格形 + NP₂」タイプの「同格の属格」は、連体節の主語を表す「主格用法の属格形」の用法の一部であると考えられる。すなわち、単純な [NP₁ 属格形 + NP₂] ではなくて、以下の通り [[NP₁ 属格形 + NP₂ + コピュラ Ø] 形式名詞 Ø] という構造をしていると考えられる。

- (48) = (18) jiyangjiyūn ai turgun de mini sakda niyalma be wakalambi.

原文に近い訳: 「將軍は何故、私の老人であるのを咎めるのだ。」

下線部の構造: [[min-i sakda niyalma Ø] Ø] be
 1.SG-i 老いた 人間 COP FN ACC

- (49) = (19) ai ai weile be meni hehe niyalma de ainu fonjimbi.

原文に近い訳: 「なんでもかんでも、私達の女であるの、に²⁹ どうして尋ねるのですか?」

下線部の構造: [[men-i hehe niyalma Ø] Ø] de
 1.PL.EXCL-i 女 人間 COP FN DAT

このように解釈することにより、満洲語の「同格の属格」に対して合理的な説明を行うことができる。

4. 結論

満洲語における「同格」の属格の問題について、本稿では以下の三点を示した。

- ①早田輝洋 (2006) の記述に反して、コピュラの未完了連体形は、少なくとも名詞述語の後ではゼロ (音形なし) になる。
- ②従属節において、①のゼロコピュラの主語は他の発音される動詞の主語同様に属格形で現れうる。すなわち、津曲 (2002) の記述にある属格主語のみならず、音声形において名詞句終わりの節の主語も属格形で現れうる。
- ③上の2点に基づく、満洲語の「同格の属格」という現象も「NP₁-i + NP₂」を

²⁹ 接続助詞の「のに」ではない点に注意されたい。

発音されないコンピュータで終わる従属節（主要部内在型関係節を含む）であると考えると、第一名詞句が定である語順でも決して奇妙ではない。日本語では許容されない「私達_iの女_i」のように見える *men-i hehe niyalma*（「私達」属格形+女）という表現は、[[*men-i hehe niyalma* Ø]Ø]「[私達が女である]（の）」という主要部内在型関係節を用いた表現である。

本稿では満洲語の格標識 *-i* による「同格の属格」が連体節の主語用法の一つに過ぎないことを示した。具格用法を除く *-i* の機能は「連体修飾標識、および連体節の主語の標識」と言える。満洲語において、*-i* 以外に生産性の高い（音形のある標識を用いた）連体修飾手段が欠けている事や、コンピュータの未完了連体形が音形無しになる事などが原因で *-i* は表面的に多機能に見えているが、（具格を別にした場合の）属格標識としての *-i* の本質は他のアルタイ諸言語の属格標識とあまり変わらないのかもしれない。一見して類似した現象の有無のみに注目しただけの対照研究には留まらない今後の研究が俟たれるものである。

具格の *-i* が属格の *-i* と同じ形をしている問題に関しては今回、何らかの結論を出すには至っていないが、一般的な属格と別の「同格の属格」を認める必要が無い以上、属格の *-i* と具格の *-i* の機能を「句と句を繋ぐ形態素」等と一般化して一つの形態素として記述する妥当性は薄れたと言える。この具格の *-i* と属格の *-i* の共時的、通時的な関係に関しては今後の課題である。

参 照 文 献

- Doerfer, Gerhard (1962) *Der Numerus im Mandschu* (Abhandlungen der Geistes- und Sozialwissenschaftlichen Klasse, Jahrg. 1962, Nr. 4). Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- Gorelova, Liliya M. (2002) *Manchu grammar*. Leiden: Brill Academic Pub.
- 早田清冷 (2013) 「満洲語の属格：同格および連体節主語をあらわす場合」『水門 言葉と歴史』25: 172-178.
- 早田輝洋 (1993) 「満洲語文語における「取りに（連れに）来る」を意味する動詞について：『満文金瓶梅』を資料として」『文学研究』90: 89-130. 九州大学文学部.
- 早田輝洋 (2005) 「満洲語の指示代名詞と指示形容詞：『満文金瓶梅』を中心に」『満族史研究』4: 114-140.
- 早田輝洋 (2006) 「満洲語の繋辞と存在動詞」『語学教育フォーラム』10: 11-59. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋 (2011) 「満洲語の形式名詞 *ngge* と *ningge* の区別」『語学教育フォーラム』24: 115-122. 大東文化大学語学教育研究所.
- 早田輝洋 (2012) 「満洲語の *n* ~ Ø 交替の史的概観」『ALTAI HAKPO』22: 93-110.
- 池上二良 (1999 [1979]) 「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」『満洲語研究』344-358. 東京：汲古書院. (初出：『東方学』58: 143-153.)
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) (1996) 『言語学大辞典 術語編』東京：三省堂.
- 風間伸次郎 (2013) 「〈特集「所有・存在表現」〉モンゴル語（ハルハ方言・ホルチン方言）・ブリヤート語」『語学研究所論集』18: 237-258. 東京外国語大学.
- Kubo, Tomoyuki (1985) Internal-head relative clauses in written Manchu. 『九州大学言語学研究室報告』6: 83-114.
- Kuroda, S.-Y. (1974) Pivot-independent relativization in Japanese I. *Papers in Japanese Linguistics* 3: 59-93.

- Kuroda, S.-Y. (1975・76) Pivot-independent relativization in Japanese II. *Papers in Japanese Linguistics* 4: 85–96.
- Kuroda, S.-Y. (1976・77) Pivot-independent relativization in Japanese III. *Papers in Japanese Linguistics* 5: 157–179.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』東京：ひつじ書房.
- Shibatani, Masayoshi (2013) What can Japanese dialects tell us about the function and development of the nominalization particle ‘no’. *Japanese/Korean Linguistics* 20: 421–444.
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法 口語篇』東京：岩波書店.
- 時枝誠記 (1954) 『日本文法 文語篇』東京：岩波書店.
- 津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』東京：大学書林.
- Watanabe, Akira (1996) Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective. *Journal of East Asian Linguistics* 5: 373–410.

資 料

『満文三国志』 ilan gurun -i bithe, 順治 7 (1650) 年序 (刊本), パリ Bibliothèque Nationale de France 蔵本.

執筆者連絡先：

〒 164-0014 東京都中野区南台 4-61-3

e-mail: hayatag@gmail.com

[受領日 2014 年 8 月 1 日

最終原稿受理日 2015 年 1 月 24 日]

Abstract

Appositive Genitive in Classical Manchu

SUZUSHI HAYATA

Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science / Kyoto University

In an attempt to adequately characterize what is commonly known as the “appositive genitive” in Classical Manchu, the use of the genitive case marker in $[NP_{1i} -i NP_{2i}]$ phrases (NP: noun phrase, $-i$: genitive case marker, i : co-referential), this paper argues that NP_{1-i} (*men-i* ‘we’ in the example below) is the genitive subject of a subordinate clause.

men-i	hehe	niyalma
1.PL.EXCL- <i>i</i>	female	person
‘we women’		

A careful analysis of the usage of the copular verb *bi-* shows that:

1. contrary to the previous literature, the copula *bi-* in the imperfect adnominal form, when following a noun, does not usually appear on the phonetic surface, and
2. the genitive subject is possible in a clause with this zero copula.

This can be taken to indicate that the Manchu “appositive genitive” structure $[NP_{1i} -i NP_{2i}]$ is a copular clause meaning ‘ NP_1 is NP_2 ’ rather than a noun phrase meaning ‘ NP_2 belonging to NP_1 ’.